

# 第31回東伏見スポーツサイエンス研究会

日時 2015年1月22日(木) 18:15より

場所 早稲田大学79号館(STEP22)303号室

## 演題

“「健康」語りに潜むポリティクスを考える”

高尾 将幸先生  
(東京理科大学 助教)

「健康」という言葉は、新聞や雑誌、そして広告からCMに至るまで、私たちの日常にあふれている。また、増大する社会保障費のなかで、医療費、なかでも慢性疾患の長期的な治療にかかるコストがやり玉に挙げられ、そうしたリスクに対処するさまざまな施策が「健康増進」の名のもとに打ち出されてきた(「生活習慣病」、「メタボ」、「健康寿命」等々)。

他方で、身近な幸せの維持や期待を「健康」ほど便利に言い表せる言葉もない。「家族の健康が何より大事」、「自分の好きなことをできるのが、本当の健康だ」——「幸福」では率直にすぎることも、「健康」と言っておけば他者と簡単に共有することができる(し、そのことを私たちは当てにしながら使っている)。

客観性が求められる科学や制度で用いられる一方、望ましい生に対する個人的な期待として漠然と口に出せる——よく考えてみると不思議な言葉だ。筆者はこうした「健康」をめぐる語りの性格を“だらしなさ、”と呼んでいるが、実はその語り口には、ある歴史性が存在する。

それとなく社会的な領域と私的な領域とを行き来できてしまうこの記号の質感は、いかにして獲得されてきたのか。また昨今の「健康」の政策化は、はたして私たちの暮らしと制度にどんな変化をもたらしつつあるのか。こうした問いに対して、本報告では出来事や言説の系譜を辿りながら迫ってみたい。



早稲田大学 スポーツ科学学術院  
Faculty of Sport Sciences, Waseda University

世話人: 正木宏明・紙上敬太  
早稲田大学 スポーツ科学学術院  
E-mail: masaki@waseda.jp